



# 日米の大学教育の違い

— なぜ、日本の大学は易しく、アメリカは厳しい？ —

INFOE（海外子女教育情報センター） 代表

松本 輝彦

4月の大学進学シンポジウムの講演会で、日米の大学教育の違いについて、お話をさせていただきました。参加者の皆様から「違いがよく分かった」とのコメントを多く頂きました。その内容を簡単に紹介します。

	日本の大学	アメリカの大学
歴史	ドイツの大学がモデル	1950年代大学改革
学生数	少数・エリート	大衆化
教育	徒弟制 弟子が見習う	教え込む トレーニング
授業	学生が 自主的に学ぶ	厳しい授業と カリキュラム
イメージ	易しい？	難しい！

## 日本の大学

日本の大学・大学制度は、明治時代に、その当時の学問・産業の先進国のドイツの大学をモデルとして作られました。

その当時の大学へは、きわめて少数の優秀な若者が進学し、学業だけではなく社会的な資質も養成する超エリート教育が行われました。

総人口に比べて学生数が極めて少ないので、その教育費の学生自身の負担はゼロにして、税金を使って社会全体で負担することができました。

教育は、先生・教授が専門分野の知識を講義形式で学生に伝えました。また、先生が研究する姿・方法を見せて、学生が見習い習得していく方法で研究者として育てていきました。まさに、「親方の技術を弟子が見習い、習得する」という、職人養成のためのドイツ的な徒弟制に従って大学教育も行われたのです。

「大学では学生が自分自身で学ぶ」として、大学・学生の自主性を重んじ、自由な環境・雰囲気の中で、大学生は学問・研究を進めていきました。

## アメリカの大学

アメリカの大学は、イギリスの大学を直接のモデルとして作られましたが、その基本的な教育はドイツの大学とはほぼ同じ考え方・方法を採用していました。

しかし、第2次世界大戦後、特に1950年代以降、アメリカの大学は大きな変化を遂げます。アメリカにおける大学教育

の大衆化で、能力に幅のある多くの若者が大学で学び始めたのです。

それまでの徒弟制的な教育方法では、急激に増加する大学生の教育が不可能になりました。多くの大学生に専門分野の知識を与え、研究の能力を高めるような、システムティックな教育内容と方法が必要になってきたのです。

まず、教育の内容と方法がしっかりしたカリキュラムに従った授業が展開されました。大人数の講義で基本的・専門的な知識を与え、少人数のディスカッション・クラスでその知識の理解を深める、というアメリカの大学の典型的な授業の形が作られました。大学が、アカデミックな知識や能力を効率よく教え込む、トレーニングの場となってきたのです。

そこでは、学生の自主性に任せた学習ではなく、プログラム化された教育内容・科目を、宿題・課題も多く評価も厳しい授業で、学生は学んでいきます。

研究者教育も、専門知識の伝達だけではなく、研究能力・スキルの養成に中心をおいたトレーニングとしてプログラム化されました。

しかし、大学教育の大衆化に伴い教育費は急激に増大し、もはや、その費用を税金だけで負担することは不可能になってきました。受益者負担の原則で学生自身の学費負担が大きく増えていきます。

☆

改革を経たアメリカの大学教育は、世界中から留学生を集めていることから明らかなように、世界の国々の高等教育システムのモデルになっています。

日本の大学も改革を進めて、アメリカ的な厳しいカリキュラムの導入や授業の充実を図っています。しかし、その改革を進めている教授陣のほとんどが伝統的な日本の大学教育の中で育てられてきたので、授業や研究の指導などで「徒弟制」に近い姿勢・方法が残っています。

国際競争に曝される世界の大学。その中で日本の大学はサバイブできるのか？ 個人的に心配しています。